

---

# 異形研究所

海鳴海翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異形研究所

### 【Nコード】

N5521Q

### 【作者名】

海鳴海翔

### 【あらすじ】

都内某所にとある研究所がある。

周囲に住む住人すら中で何が行われているか知らない。

そんな研究所に今日もまた居場所をなくした少女が運び込まれ、その姿を変えられる。

シユールなTFを目指します

## 研究者 白衣の男、研究対象 リサ

漆黒に支配された空間

そこに漂うのは鉄と何かが腐ったような異臭

「気分はどうだい？」

そんな男の声とともに電気が付き、部屋の半分だけ姿だけあらわになつた

壁際に置かれた心電図らしきものや0と1の羅列が表示されたいくつかのパソコンのディスプレイ、その近くの棚には名前も聞いたことのない薬品がいくつも並び、その隣の机には薬品を調合するためのプラスチックやビーカー、顕微鏡などが置かれている

この部屋を見た人は十中八九何かの研究室と答えるであろう部屋と もう半分を隔てているのは頑丈な鉄格子

それだけで残り半分の空間が牢屋か檻であるということが分かる そんな研究室の電子機器の置かれた机の隣に部屋の出入り口がある そこに先ほどの声の主である白衣の男が立っていた

男は二十代後半、髪はボサボサ、あごに無精髭を生やしていた

男は自分の問いかけに何も答えない鉄格子の向こうの闇に包まれている誰か、もしくは何かに対して何も言わず鉄格子に近づく

そして、男が鉄格子まであと五歩ぐらいの所で闇の中で何か動く 「怯えているのかい？ まったく、今の君は僕ごとき人間を恐れることもなかるう」

男の言葉に対する返事はない

それに対してか男はため息を一つ、白衣のポケットからリモコンを取り出し操作した

それにより闇に支配されていた鉄格子の向こう側に光が付く  
そして、牢屋の中に居た者の姿があらわになる  
少女であつた

中学生か高校生に上がったばかりに見える少女

ただ、彼女を普通と呼ぶのには疑問が残る  
その理由はその手足

彼女の腕と足は黒くゴツゴツした鱗に覆われており、そこから伸びる爪は硬く鋭く刃になっている

男の居る場所からでは見えないが少女の後ろでは腕や足と同じ材質の爬虫類の尻尾が生え、床にだらしなくたれてる

それらの明らかな違いだけでなく、その紅の瞳や口の中の鋭い犬歯なども彼女が人外であることを照明していた

「あいつも変わらず、君は美しいね」

男の賞賛の言葉、それに対する少女は返答代わりに男を睨みつける

「そんな怖い顔をしないでおくれ、リン」

「私はリンなんじゃない!!」

リン、そう呼ばれた少女はそう叫び否定する

「そうか、なら本当の名前を聞こうか？」

必然的に返ってきた男の問いにリンは黙り込み、そして、叫ぶ

「私をこんな姿にして、記憶まで消したのは貴方じゃない!!」

「ふふ、それは正しくない。姿を変えたのは僕だが、記憶を消したのは<組織>の連中だ」

男の弁解、しかし、少女には関係ないことだ

記憶を消したのは男自身でなくても男の所属する機関だし、自らの姿を異形へと変えたのは男自身が言った通り彼だ

そこにどんな事情があろうとも男がリンの憎悪の対象になるのは必然だ

それを全て分かっているといわんばかりに男はリンの悪意を受け流し、時にはそれすら美しいものだという

「さて、食事の時間だ」

そう呟くと一旦男は部屋を出て、大きな皿を持ってきた

その皿を鉄格子の下に付いていた小さな扉を開けて中に入れる

皿の上に乗っかっているのは程よく脂身が付いた生肉

人の子なら、それを食べ物だと認識しないだろう

しかし、リンの口の中はよだれが溢れていた  
食べたい、という欲求がリンの心を支配していく

そして、それを理性が抑えきれなくなったところでリンは肉に飛びつき、手も使わずに獣のようにかぶりつく

生肉の中に残っていた血があふれ出し、リンの口周りを紅く染める  
その鉄の味ですらリンには食事のスパイス程度にしかなかった

「流石に一週間も経つと順応するね。一週間前は食らうことすら拒んだ君が今はそうやって醜く食らいついでいる」

男の言葉にハツとしたようにリンの動きが止まる

しかし、もう既に皿の上にあつた2キロの肉の塊は跡形も無く、リンは皿の上に残った血液を舐めている最中だった

「でも、まあ、以外だったよ。エサの正体を知ってなお、君がこんなに順応するなんて」

エサの正体、その言葉を聞いた途端、リンは強烈な吐気に襲われる  
しかし、何も出てこない

リンは強く、先ほど食した物が出てくることを望むが出てこない  
強烈な吐気と罪悪感に飲まれリンの瞳に涙が溜まる

「前言撤回か。毎回、食事の度にそれではつらからう」

男の慈悲深い言葉

「ぐっ！なら、食べ物を変えてよ。もう、人間なんか食べたくない」  
そう、リンの食した2キロの肉の塊はもとは人間だったもの

その真実はリンを苦しめた

「ふむ、そうは言うが。今の君は人肉しか食せないのだ。仕方あるまい。ああ、もちろん、餓死されるつもりもない」

男の言葉にいつもどおり絶望を感じて、ズルズルと定位置となった  
部屋の隅へと行き嗚咽を漏らす

「まあ、安心したまえ。すぐにお友達が来るからな」

そう言い、男が見つめた先にあるパソコンのディスプレイには品種名；人、個別識別名称；リサの文字と1人の少女の顔写真が表示されていた

研究者 白衣の男、研究対象 リン 1

「ここは、どこなの……」

少女が目を覚ましたのは異臭の漂う、空間だった

周囲は黒が支配していて状況を把握できない

何処とも知れない場所で一人座り込んでいる現状は少女の不安と恐怖を掻きたてるのには十分すぎるだろう

そんな状況で……

「っ!!」

ジャラリ、と鎖が擦れ合ったような音が響けば、ただでさえ心を支配せんとする恐怖はさらに支配領域を広げていく

「だ、誰か居るの？ここは何処なの？私は……」

誰なの？自然と自らの口から出ようとしていた質問は明らかに異常なものだった

そして、気付く、思い出す

いや、気付けない、思い出せない。

少女は自らに関することを全て思い出せなかったここにいる経緯、家族や友人、自分の名前にいたるまで、自分の素性について覚えていなかった。

むしろ、もともとそんな記憶があったのかすら疑わしいほど、綺麗に記憶になかった。

不安と恐怖が絶頂を越えて、心の内に渦巻く。

今にも叫び声を上げて、この場を去りたかった。

だが、それも出来なかった。

「おや、目が覚めたのかい？まったく、彼女が目を覚ましたら教えてくれと言っただろう、リン？」

少女の視界を光が覆い、耳にそんな男性の声が響いた。

眩しさで閉じた瞼を開くとまず目に付いたのは鉄格子。

光と闇を分けるように明るい部屋半分とこちらを分かつように鉄格

子が存在していた。

そして、ようやく視線は明るい部屋に向かう。

そこは記憶の無い、少女にも何かしらの研究室だということが分かる部屋だった。

部屋をぐるりと見渡した視線が部屋にある唯一の扉の前に佇む、白衣の男を捉える。

彼が先ほどの言葉を発したのだろう、そして、この状況を作り出したのだろう。

安易な想像だが、的は得ているし、この状況でそこまで考えられたことはむしろ賞賛に値する。

グルルル、白衣の男が机の上のリモコンに手を伸ばそうとすると、少女の隣側からそんな獣のような唸り声が聞こえ始める。

少女はとっさに視線を右へと向けるが闇が支配しているこちら側では『何か』が居るのか認識することは出来無い。

しかし、鎖の擦れる音と獣の唸り声、少女がその発信源から距離を取ろうとするには十分すぎる理由だ。

「電気を付けるな、と？どうせ、のちのち分かってしまうことだろう？だったら、早い方が良い」

男は『何か』に動じずに『何か』に話かける。

「それに、君は理解していたと思っただが？私は君らがそうやって反抗的な態度を見せることをしたくてたまらないのだよ」

ニヤニヤと楽しそうな笑みを浮かべて、男がリモコンを操作する。すると、また、少女の視界を白が支配する。

まあ、光になれていたのですこまめなものではなく、すぐに瞼を開ける。

開けてから、後悔する。

「ひっ！！」

闇に潜む『何か』を恐れて、男ではなく『何か』を睨みつけていた少女は光に照らされた『何か』の正体をしっかりと見てしまったのだ。

そこに居たのは少女と黒いトカゲをたし合わせたような様相をした生物だった。

腕と足は黒くゴツゴツした鱗に覆われており、そこから伸びる爪は硬く鋭く刃になっている

少女の後ろでは腕や足と同じ材質の爬虫類の尻尾が生え、床にだらしなくたれている。

顔も頬の当りが鱗に覆われつつあり、紅色の瞳が怯える少女を写していた。

『バケモノ』そうとしか言い表せない姿だった。

「どうだ、美しいだろう？」

男の言葉に少女は賛同しかねる。

少なくとも美しいと思える人間はまともではないだろう。

そんな、男と無言の少女のやり取りを『バケモノ』である少女は寂しそくに眺めている。

「彼女はリンと言う。仲良くしたまえ」

出来る訳がない！、断言したかった、でも、そう言えば前にいる『バケモノ』に襲われる気がして言えない。

『バケモノ』の手足は鎖で縛られているが、余りにも心許ない。

「やれやれ、そんなに分かりやすく怯えることもなかるうに。……」

君は気付いているかね？何故、自分がリンと同じ檻にいる理由を？」

少女の背に悪寒が走る。

「私、食べられてしまうの？」

そうとしか考えられなかった。

目の前に居るのは『バケモノ』、少女は自分に与えられた役目はエサであると思っただのだ。

しかし、少女の答えに男は笑い出す。

男の反応に少女は苛立ちを覚える。

「いやあ、すまない。余りに楽観的なものだから笑ってしまった」  
楽観的？

『バケモノ』のエサになる以上のことがある。

しかも、それが自分の身に起ころうとしている。

それら二つのことを認識してしまうと、それが何なのか考えている精神力など少女にはなく、ただ泣き叫ぶだけだ。

その様子を男はとても楽しそうに、『バケモノ』は哀れみと懐かしさを込めた瞳で見つめていた。

「動物園を思い出してごらん。檻にしているのは動物、檻の外に居るのは人間だ。つまり、檻と一緒に入れられるのは同類ということだ、分かるかい？」

分らなかった。

何たって、少女は人間だ。

『バケモノ』と一緒に檻に入れられる道理はない。  
「確かに《今は》人間だな。しかし、何時までも人間でいられると思うかい？」

冷たい汗が背筋を降りて行く。

この後に続く、男の言葉を聞きたくなかった。  
でも、聞こえて来る。

耳を塞げない。

「ここがどういった施設か知りたいだろう？まあ、予想は付いているのかもね。だとしたら、たぶん、ご名答だ。そう、ここは人間を『バケモノ』に変える施設さ。そして、君はそのモルモットとしてここに居るんだ」

「いや・・・帰してよ・・・家に、帰して」

数刻振りに出た、少女の声は恐怖の余り、とても擦れていた。

「さて、ここで聞きたい事があるんだ。君の嫌いな生物はなんだい？」

そう問う男の顔は素晴らしく、恐怖心を掻きたてる笑顔だった。

## 研究者 白衣の男、研究対象 リン 2

血生臭い研究室に新たに少女が来てから一週間が経っていた。

「リン、いい加減答えてくれないか？君の嫌いな生物は？」

リン、それが少女に与えられた名前だ。

しかし、少女は認めていなかった。

自らを証明する唯一の名前を全て奪って行った相手に与えられる。

そんな現実を認められなかったのだ。

まあ、それが続いたのは最初の内だけで、今では無意識に反応するようになっていた。

それでも、先ほどの男の問いにはまったく答えない。

自分自ら、これから変えられる事となる異形を決めるなど出来るはずも無いだろう。

もちろん、男に決めさせるより、自分で決めた方が言い事はリンも気付いている。

でも、成りたい異形などリンにはない。

そもそも、異形に成りたくないのだから当たり前だ。

故に一週間も経っていた。

そんな風に答えをあやふやにするリンに対して男はしばらく机に向かって考え込んだ後に部屋の角のあった本棚から数冊本を取り出し、読み出す。

その光景をリンは不思議そうに見つめていた。

「ん？気に成るかい？これは、あれだ同人誌だよ」

そう言い、リンに見せる本の表紙には確かにそれらしい絵が書かれている。

「これは同人誌の中でもTFと言われるやつさ。内容はそうだな・  
・正しく、今の君達みたいな内容さ」

見せた方が早いと考え、男は檻の前に本を放り投げる。

それで丁度開いたのは一人の少女が異形へと姿を変えられるページ

であった。

リンはすぐに目を逸らす。

以前の彼女なら、気持ち悪いとか言いながら笑えた話だろう。しかし、今は笑えない状況だ。

「つまり、これは私の参考資料な訳だよ。これらを読みながら薬を作ったりするんだ」

檻の前の同人誌を拾いながら告げる。

のんびりしていると、自分は最悪のシナリオを用意出来る、と言われていたような気分になる。

実際に男は告げているのかもしれない。

リンは焦ったように思考する。

自分が一番、異形となって大丈夫な生物は何だ？

しかし、思いつくわけではない。

どんな物になっても待っているのは絶望だけなのだろうから。

そうと分かっているにも必死に思考を巡らせるしかあるまい。

そうしてリンが必死に動物の姿を思い浮かべては拒否していると電子音が鳴り響いた。

数台あるパソコンのディスプレイのうちの一つにメールが届いたらしい。

男はため息を大いに吐いて、同人誌を本棚に戻してからディスプレイに向かう。

そして、じっくりと読んだ後、鉄格子まで来て告げる。

「まったく、君がなかなか教えてくれないから。組織の方から命令が来てしまった」

リンには男の言っている意味がよく分からなかった。

しかし、これから先に続く言葉が良い事の訳がない。

「君の墮ちる生物が決まった。食料に出来る家畜だそうだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5521q/>

---

異形研究所

2011年4月12日03時19分発行